2018年8月19日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　**「雅歌：愛の目ざめまで」**

聖書箇所：雅歌8:1-5

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は雅歌からのメッセージです。雅歌の内容を一言で言えば、「恋愛歌」です。ここには神とか主と言う言葉は全く出てきません。このような文書がなぜ、聖書の文書となったのか、についてはいろいろ議論があります。エステル記というもう一つの文書にも神という言葉が出てこないのですが、バビロンに住むユダヤ人抹殺計画を、王妃となったユダヤ人女性エステルが葬り去る、という話の内容からして、苦難にあるユダヤ人の救済物語である、ということが解ります。主なる神の奇跡物語です。しかし、雅歌は文字通り理解すると単なる恋愛歌以上のものではありません。神様の力が示されている、という訳でもありません。

　恋愛歌であれば日本にも昔からありますね。「相聞歌」というのがそれで、万葉の時代からあります。百人一首にも額田王（ぬかだのおおきみ）の歌などがあります。福井県越前市に「万葉の里」というのがあって、そこでは毎年、相聞歌の募集と表彰をやっているようです。天平時代の夫婦による相聞歌が載っていましたので、資料でお渡ししました。

雅歌の中から一節お読みします。7:1-5をお読みします。「高貴な人の娘よ。 サンダルの中のあなたの足はなんと美しいことよ。 あなたの丸みを帯びたももは、 名人の手で作られた飾りのようだ。/あなたのほぞは、混ぜ合わせたぶどう酒の 尽きることのない丸い杯。 あなたの腹は、ゆりの花で囲まれた小麦の山。/あなたの二つの乳房は、ふたごのかもしか、 二頭の子鹿。/あなたの首は、象牙のやぐらのようだ。 あなたの目は、バテ・ラビムの門のほとり、 ヘシュボンの池。 あなたの鼻は、ダマスコのほうを見張っている レバノンのやぐらのようだ。/あなたの頭はカルメル山のようにそびえ、 あなたの乱れた髪は紫色。 王はそのふさふさした髪のとりこになった。」とあります。雅歌の登場人物は、花婿と花嫁と第三者である「エルサレムの娘たち」ですが、お読みした箇所は、花婿即ち男の恋人が花嫁即ち女性の恋人の身体について描写したものです。かなりセクシャルな感じもあたえます。このような文書が正典聖書の中にあること自身不思議と言うしかありません。

 旧約聖書としての文書の選定は長い歴史を経ていますが、最終的にはAD70年エルサレム第二神殿の崩壊の後、地中海沿岸にあるヤブネという町にのがれたユダヤ教のラビたちが選定・確定したと言われています。例えば、BC2cにおけるシリア支配からのユダヤ人独立によってできたマカバイ王朝の歴史のようなユダヤ人としては極めて重要な文書がこの時の選定から漏れており、ユダヤ人の聖書正典には入っておりません。マカバイ書と言い、カソリックは外典として旧約聖書に入れています。私たちプロテスタントの使用している聖書はルター以来、タナクというユダヤ人正典聖書に準拠していますのでの、このマカバイ書は旧約聖書に含まれていません。この選定の時、雅歌が聖書正典に入れられているのです。タナクでは、聖書の最後に「諸書（もろもろの書）」という12の文書がまとまりになっていますがその5番目の文書です。諸書は詩篇に始まり、歴代誌が最後です。歴代誌はユダ王国の歴史を扱った文書ですが、どうも、聖書正典にいれるかどうか議論があって結局、歴史書としてではなく、諸書の最後として入った、ということのようです。

雅歌も正典に入れるかどうかについて議論があり、何らかの理由で聖書正典に入ることとなったようです。その理由は聖書のアラム語訳にあるように思われます。旧約聖書のアラム語訳は通常タルグムと呼ばれます。アラム語はバビロニアからシリア、カナンにおいて使われた国際言語であり、BC3c頃以降カナンの地でも一般的に使用されるようになり、イエス様も日常的にはアラム語で話された、とする説もあります。タルグムはヘブル語聖書のアラム語翻訳というのが基本ですが、雅歌については、タルグムはヘブル語正典とはまるで違う内容です。例えば、ヘブル語正典の1:1-2は「ソロモンの雅歌/あの方が私に 口づけしてくださったらよいのに。 あなたの愛はぶどう酒よりも快く」となっていますが、タルグムでは「預言者ソロモン、イスラエルの王が全世界の主の前で預言の霊により語った歌と賛美。十の歌がこの世界にて語られた。」という表現で始まり、「第一の歌、アダムがこの時語った。彼の罪は赦され、そして安息日が来て、彼を守った。彼は口を開き、言った。「一つの詩、安息日の歌」（詩編92）。」と続き、出エジプト以降のイスラエルの信仰について語っています。ヘブル語の恋愛詩の内容とはまるで異なります。聖書正典に入れられることになったのは、このタルグムのように雅歌を解釈し、神とイスラエルの民との関係に置き代えることにより、正典に入れられることになった、という見方です。

もう一か所タグルムを見てみます。雅歌の最後の8:14には「私の愛する方よ。急いでください。 香料の山々の上のかもしかや、 若い鹿のようになってください。」とありますが、対応のタルグム雅歌8:14は「その時、イスラエルの集まりの長老は言うであろう。「逃げよ、我が愛する者、この世界の主、この汚れた地より。そしてあなたの顕現が上なる天にあらしめよ。しかし度重なる苦難の中で、私たちが祈るとき、片目を閉じ、片目を開けて眠るガゼルの如く。」とあります。「逃げる」ことについて語っているには同じですが、正典では、恋人に逃げてください、と言っていますが、タルグムは「汚れた地」から逃れよ、と言っています。

旧約聖書正典が最終確定した頃は、日常用語はアラム語であったと推測されますので、タルグムの元になった文書が聖書正典の代わりに使われた可能性が高い、と推測されます。すると、雅歌のタルグムはまさにユダヤ人の信仰書ですから、聖書正典に選ばれたことは不思議ではありません。ユダヤ教のなかではタルグムが長い間ヘブル語正典と並列して読まれていたことや、出エジプトを記念するユダヤ人最大の祭り過越し祭の8日目に雅歌が読まれる慣習があること、等を合わせて考えると、雅歌が聖書正典の文書とされたのは雅歌のタルグムが理由である、と考えるのは自然です。もっとも、その後、ユダヤ人社会のなかでアラム語がつかわれなくなってからは、過越し祭の8日目に読むのは、雅歌ヘブル語のみとなって今にいたっています。

但し、聖書正典選定に大きくかかわったラビ・アキバに関するエピソードがあります。このラビ・アキバという人物は極めて貧しい羊飼いの家の出身であり、聖書を学びたい、とお父さんに言ったところ「そんな余裕はない」というつれない、返事でした。あるとき、アキバが羊飼いをしている時、ラケルという女性に一目ぼれしました。ラケルは「トーラーの勉強をし、ユダヤの教育をあきらめずに受けるなら、結婚しても良い」と答えます。娘の父親は怒って娘を勘当しますが、ラケルはアキバと結婚します。働いても働いても楽にはなりません。子供が生まれ、学校に行く年齢になった時、子供と一緒に、聖書の学びをすることを決心しました。ラケルは働き、仕送りをします。美しい髪の毛を切って売ることもしました。そして、アキバは偉大なラビになりました。このラケルとアキバの愛の関係を表したのがこの雅歌だというのです。ラバ・アキバは雅歌を正典聖書に入れることに強く執着した、と言われています。ラバ・アキバはAD135年のローマ帝政への反乱であった第二次ユダヤ戦争においてユダヤを支持し、焼き鏝（こて）刑で死刑になったと、言われています。

　「雅歌」という呼び名は漢語の聖書から来ていると言われています。雅（みやび）の歌という意味です。ヘブル語言語では「shi:r hashiri-m」であり「歌の中の歌」です。ラテン語も「katikum katikorum」であり、「歌の中の歌」です。英語も「Song of Songs」ですから同じです。「歌の中の歌」は、直訳は「歌の歌」ですが、歌の中で最も優れた歌、という意味です。このような言い方は旧約聖書では沢山あります。「至聖所」と訳されているのは「聖所の聖所」ですし、「王の王」という言い方や「神の神」と言う言い方や、伝道者の書には有名な「空の空」という言い方も出てきます。「歌の歌」と同じ言い方です。また、著者ソロモンの名をとって「ソロモンの歌」、英語では「Song of Solomon」と呼ばれることもあります。ソロモンは知恵者の代表とされていることから、正典には入っていませんが、「ソロモンの詩編」、「ソロモンの知恵」、と言う文書もあります。

雅歌は聖書らしくない文書であることから、その解釈を巡ってはいろんな説があります。その内、有力なのは比喩説というものです。ユダヤ人ラビの聖書についての解釈書であるタルムードは雅歌に登場する花婿を主なる神、花嫁をイスラエルの民の比喩である、と解釈して、雅歌はイスラエルの神への愛と信仰の告白である、としています。雅歌の中にはそのように解釈しても良いし、そのように解釈した方が聖書の文書らしい、といえる部分もありますが、雅歌のすべての節をそのような比喩である、と解釈するのには無理があります。また比喩説にはキリスト教側でのものもあります。花婿を主イエス、花嫁をキリスト教の教会と比喩的に理解するものです。これが中世カトリック教会の主流です。想像たくましく、「乳房」を聖書、没薬の袋を、キリストの象徴とする、などという強引な解釈もあります。その他にもソロモンの生活を劇にしたものだ、という説などもありますが、取ってつけた解釈であり、眉唾の感じです。最近では、そのまま恋愛詩と理解し、結婚前また結婚後の男女を通して、「愛」について歌いあげた文書と理解するのが主流になっているようです。その愛の関係が、どのような愛を指しているのかについてはこの文書を読む者に委ねられる、という解釈です。私も、そのような理解で良いのではないか、と思います。従って、今日は、恋愛詩としてよみ、その中に示された「愛」とはどのようなものなのか、についてお話ししたい、と思います。なお、雅歌は最初に「ソロモンの雅歌」とあることから、伝統的に著者はソロモンと伝えられてきましたが、旧約学の研究では、事実とは考えにくく、BC3c頃、ソロモンの名を借りて書かれた文書というのが有力です。

雅歌6:13に「帰れ。帰れ。シュラムの女よ。 帰れ。帰れ。私たちはあなたを見たい。 どうしてあなたがたはシュラムの女を見るのです。二つの陣営の舞のように。」とあります。雅歌全体を、この「シュラムの女」とソロモンの愛の交流を描写したものとして解釈する考え方もあります。この「シュラムの女」については諸説ありますが、第一列王記1:1-3に「ダビデ王は年を重ねて老人になっていた。それで夜着をいくら着せても暖まらなかった。/そこで、彼の家来たちは彼に言った。「王さまのためにひとりの若い処女を捜して来て、王さまにはべらせ、王さまの世話をさせ、あなたのふところに寝させ、王さまを暖めるようにいたしましょう。」/こうして、彼らは、イスラエルの国中に美しい娘を捜し求め、シュネム人の女アビシャグを見つけて、王のもとに連れて来た。」とあります。この「シュネム人の女アビシャグ」が雅歌に登場する「シュネムの女」だというのです。確かに、列王記のこのあとをみると、アビシャグはソロモンに寵愛された女性であったようです。ダビデの子のアドニヤがアビシャグを妻として求めたため、弟で王となったソロモンから王位簒奪の疑いをかけられ殺害されました。アビシャグは男を狂わせるほどの魅力の持ち主だったのかもしれません。しかし、雅歌の当事者の一方が時の王であったと考えるのは、雅歌の中で、そのような王との関係を示す匂いはほとんどありませんので、若干無理のある解釈のように思います。単純に、熱烈な恋愛関係にある恋人と理解すれば良いでしょう。

この話のなかで注意したいのは「シュラムの女」と言う時の「シュラム」です。列王記の方では「シュネム」です。ヘブル語で「L」と「N」は移動可能な語ですから、そもそもは同一単語だと考えられます。これは地名ですが、北ヨルダン川の西、肥沃なエスドラス平原にあった町と考えられています。この名前は平和の意味の「shalo:m」から来ています。「平和を齎す者」と訳せます。ソロモンという名前もこの「平和」の意味の単語から来た名前です。雅歌の最後の方の8:10には「私は城壁、私の乳房はやぐらのよう。 それで、私はあの方の目には 平安をもたらす者のようになりました。」とあります。この「平安を齎す者」が「シュネムの女」です。雅歌という「愛」についての文書に「平和」がちりばめられていることが象徴的です。「愛」の満ちている社会は「平和」です。雅歌の文脈に添って考えても、花婿と花嫁の恋の交わりが展開している間は「平和」の匂いがあたり一面にあります。また、比喩的解釈に立っても、神とイスラエルの関係、主イエスと教会の関係が、雅歌に描かれるような愛の関係にあるとき、神との平和、人と人の間の平和が保証されていると言うことです。

実は「シュネムの女」が出てくる箇所がもう一か所あります。第二列王記4:8-37です。ここでは、「シュネムの女」が神の人と呼ばれたエリシャという預言者を自宅にとめてもてなしたため、エリシャはこの女に子供が産まれる、と告げます。そして子供が産まれますが、日射病のようなもので死んでしまいます。「シュネムの女」はこれをエリシャに知らせるために旅にでます。そしてエリシャが女の家に来て、体を子供の死体に着けると、子供がよみがえった、という物語です。新約聖書ヨハネ福音書11章におけるラザロの復活や年老いて子をもうけたエリザベツとともに語られる箇所です。「シュネムの女」は信仰者の手本のようにして語りつなげられてきました。「シュネム」という地は、信仰深い女性の地、という訳です。その「シュネムの女」がエリシャを呼びに行くところを絵画にしたものもあります。あの暗闇と光の絵で有名なレンブラントの作品です。

　本文に入ります。まず第1章は「あの方が私に 口づけしてくださったらよいのに。 あなたの愛はぶどう酒よりも快く、/あなたの香油のかおりはかぐわしく、 あなたの名はそそがれる香油のよう。 それで、おとめらはあなたを愛しています」で始まります。ここは結婚を控えた花嫁の言葉と解釈できます。恋人同士で女性の方が述べている部分と考えてもよいでしょう。ここでは通常の解釈に従い、花嫁と花婿の応答の歌の前提で解釈します。1:1-7までは花嫁の言葉です。「あの方」と言っているのは当然花婿のことです。3節で「おとめらはあなたを愛しています」というのは自分の恋人は多くの娘から好かれている、と言っているのです。7節に「顔おおいをつけた女のように」とありますが、これは「娼婦のように」ということです。7節までを通してみますと、花嫁が花婿に愛の告白をしたいのだけれど、自分はそれに値しないのではないかなど、じりじりした心が表現されています。8節は「女のなかで最も美しい人よ。 あなたがこれを知らないのなら、 羊の群れの足跡について行き、 羊飼いの住まいのかたわらで、 あなたの子やぎを飼いなさい」とあります。これは花嫁をとりまく「おとめたち」が花嫁に対し言ったこと、と解釈されます。そして9-11節は「わが愛する者よ。私はあなたを パロの戦車の雌馬になぞらえよう。/あなたの頬には飾り輪がつき、首には宝石をちりばめた 首飾りがつけてあって、美しい。私たちは銀をちりばめた金の飾り輪を あなたのために作ろう」とあり、花婿が花嫁を讃えて言っている言葉です。12-16節は花嫁、15節は花婿、16-17は花嫁、と続きます。このように、花嫁、花婿の相手を讃える歌が交互に続き、恋愛歌となっています。ところどころに、第三者の「おとめたち」や花婿の「兄弟たち」の歌が入っています。

　このようないくつかの愛の応答歌によって一塊（ひとかたまり）の歌となります。1:2－2:7までが第一の歌です。この最後の言葉は2:7の「愛が目覚めたいと思うときまでは」という言葉です。実はこの言葉は、3:5で再び繰り返され、8:4で更に繰り返され、雅歌の終結に向かいます。“愛が目覚めたいとして自分から目が覚めるまではこの夢のような時が続いてくれるように“という意味です。恋の関係が完結する時まで、の意味で結婚を意味する、という解釈もあります。この第一の歌のテーマはフランシスコ会訳では「愛の願い」というタイトルが付けられています。結局、第一の歌は花嫁―おとめたちー花婿―花嫁―花婿―花嫁―花婿―花嫁―花婿です。

第二の歌は2:8-3:5です。この第二の歌を歌うのは花嫁―おとめたちー花嫁―花婿、と変わります。第二の歌は「愛する者の歌」とタイトルが付けられています。ここも3:5の「愛が目覚めたいと思う時までは」という表現で終わります。2:16-17のような愛の賛歌とも言うべき箇所もあります。「私の愛する方は私のもの。 私はあの方のもの。 あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。/私の愛する方よ。 そよ風が吹き始め、影が消え去るころまでに、 あなたは帰って来て、 険しい山々の上のかもしかや、 若い鹿のようになってください」とあります。

3:6-5:1が第三の歌になります。花嫁―花婿―花嫁―花婿―おとめたち、と歌い手が変わります。歌のタイトルは「愛する者を追い求める」です。4:1では花婿が花嫁を歌っています。「ああ、わが愛する者。 あなたはなんと美しいことよ。 なんと美しいことよ。 あなたの目は、顔おおいのうしろで鳩のようだ。 あなたの髪は、ギルアデの山から降りて来る やぎの群れのよう」とあります。ギルアデの山というのはヨルダン川東岸の山脈のうちの山ということでしょう。千メートル程度の山並みが続いています。この第三の歌の最後は、5:1ですが、前半は花婿、後半はおとめたちの歌と解釈されています。おとめたちの歌は「友よ、食べよ。 飲め。愛する人たちよ。大いに飲め」となっています。なにかしら第三者が花婿、花嫁の両方、そして宴会参加者全員に言っているように思われます。

第四の歌は5:2-6:3です。タイトルは「心は目覚めている」です。最初は花嫁の歌ですが「心は覚めて居ました」とあります。第二の歌の最後の「愛が目覚めたいと思う時までは」に類似した表現です。花嫁―おとめたちー花婿―おとめたちー花嫁、とうたわれています。この第四の歌の最後は花嫁の熱烈な歌です。「私の愛する方は、 自分の庭、香料の花壇へ下って行かれました。 庭の中で群れを飼い、ゆりの花を集めるために。/私は、私の愛する方のもの。私の愛する方は私のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています」と記（しる）されています。これらの男女の応答を夫婦のあるべき姿を示している、という注解がありましたが、日本人はこんな熱烈なことは口にできないように思います。私はとてもだめです。イスラエルの男女とは異なる表現でも良いとは思いますが、日本人の夫婦はいわな過ぎると言われているのも事実でしょう。

なお、「ゆりの花」が美しいおとめのしるし、とされていますが、これは、讃美歌の歌詞になっています。讃美歌496番です。歌詞をお読みします。「1.うるわしの白百合/ささやきぬ昔を、/イエス君の墓より/いでましし昔を。/うるわしの白百合/ささやきぬ昔を、/百合の花、ゆりの花、/ささやきぬ昔を。 2.春に会う花百合/夢路よりめさめて、/かぎりなき生命に/うるわしの白百合/ささやきぬ昔を、/百合の花、ゆりの花、/ささやきぬ昔を。/3.冬枯れのさまより/百合しろき花野に、/いとし子を御神は/覚したもう今なお。/うるわしの白百合/ささやきぬ昔を、/百合の花、ゆりの花、/ささやきぬ昔を。」

雅歌には様々な花、木、植物、動物等々が登場しますが、「ナルド」もその一つです。4:12-15を読みます。「私の妹、花嫁は、閉じられた庭、閉じられた源、封じられた泉。/あなたの産み出すものは、最上の実をみのらすざくろの園、ヘンナ樹にナルド、/ナルド、サフラン、菖蒲、肉桂（にっけい：シナモン）に、乳香の取れるすべての木、没薬、アロエに、香料の最上のものすべて、/庭の泉、湧き水の井戸、レバノンからの流れ。」とあります。花婿が花嫁の美しさを譬えている箇所です。ナルドはおみなえし科の植物で、大変香りが強い植物です。今日では入手困難と言われています。私は結婚式の時、妻と一緒にこの歌を歌いました。讃美歌391番です。歌詞をお読みします。「1.ナルドのつぼ、ならねど/ささげまつるわが愛/みわざのため、主よ、潔めて/うけませ、うけませ/2.よわき民に、ちからを/おぐらき世に、ひかりを/あたえて主の、たかき御旨/なさばや、なさばや/3.怖（お）ずるものに、平和を/なげくものに、のぞみを/わかちて主の、ふかき恵み/あらわさん あらわさん/4.この世のわざ おわりて/あまつ国に、かえらば/主よみまえに、仕えまつらん/ときわに、ときわに」です。

6:4-8:4までが第五の歌です。タイトルは「私の小鳩は唯一人」です。6:9で花嫁が「汚れのないもの、私の鳩はただひとり」と言われています。6:8に「王妃は六十人、そばめは八十人、 おとめたちは数知れない」とありますが、これはソロモンのことを指しています。第一列王記11:3には、「彼（ソロモン）には七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがあった」と言われています。要するに多数の王妃とそばめ、ということでしょう。これはソロモンの罪の一つですが雅歌では消極的に書かれてはいません。

6:13に「帰れ。帰れ。シュラムの女よ。 帰れ。帰れ。私たちはあなたを見たい。 どうしてあなたがたはシュラムの女を見るのです。 二つの陣営の舞のように」とうたわれています。これはおとめたちが、花嫁に言っている歌のように思われます。この13節の後半部分は花婿がおとめたちに言っている言葉だという説もあります。「シュラムの女」というのは聖書で、ここに2度でてくるだけです。この解釈については先ほど若干申し上げました。シュラムという言葉は「聖なる」という意味のサレムから来ている言葉のようでもあります。サレムというのはエルサレムのことです。アメリカ・オレゴン州の州都がサーレムですがここからきた町の名でありエルサレムを意味したことばです。これらのことから「シュラムの女」とはエルサレムにおけるソロモンの愛人のことだ、というイメージがつくられます。ソロモンの愛人ですから絶世の美女ですが、男を手玉に取る罪深い女、というあまりありがたくないイメージが出来上がります。「シュネムの女」という、老人ダビデの前に横たわる裸の女性というなまめかしい絵画もあります。有名なレンブラントの作の「シュネムの女の出発」という絵もあります。誘惑素振りの女性を「シュネムの女」とも言います。そのようなシュラムの女におとめたちは“本来の花婿のもとに帰れ、帰れ”と叫ぶのですし、花婿はおとめたちに“どうしてあの女をちやほやするのですか。二人の男を行ったり来たりしているのに”と言います。この「帰れ、帰れ」はヘブル語のshu:bであり、神に立ち帰る、即ち悔い改めをさす２つのヘブル語のひとつです。彷徨えるイスラエルに神に立ち帰れ、と言っているのだと、最初にもうしあげた比喩的解釈ができます。

8:5から最後までは第六の歌でタイトルは「愛は死のように強い」です。8:6には「愛は死のように強く、 ねたみはよみのように激しいからです。 その炎は火の炎、すさまじい炎です」とあり、死ぬほど愛している姿が描かれています。むかしから男と女の愛憎物語は多くの悲劇を生んできましたし、小説のテーマとしても今もって尽きることはありません。どうして神様はこのような二種類の人を創られたのでしょうか。愛と言うことを理解させるためなのでしょうか。この第六の歌は、おとめたちー花嫁―兄弟たちー花嫁―花婿―花嫁と目まぐるしく歌い手が変わっています。そして8:14「私の愛する方よ。急いでください。 香料の山々の上のかもしかや、若い鹿のようになってください」という花嫁の言葉でしめくくりとなります。

本日の聖書箇所8:1-5は第五の歌と第六の歌にまたがっており、花嫁―花婿―おとめたちー花嫁と歌い手が変わっている箇所です。8:1-3は花嫁の言葉です。2-3節で花嫁は「私はあなたを導き、私を育てた私の母の家にお連れして、 香料を混ぜたぶどう酒、ざくろの果汁を あなたに飲ませてあげましょう。/ああ、あの方の左の腕が私の頭の下にあり、 右の手が私を抱いてくださるとよいのに」と言っています。花婿を自宅に連れてきてベッドを共にできたら良いのに、と言っています。続いて花婿が「エルサレムの娘たち。 私はあなたがたに誓っていただきます。 揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。 愛が目ざめたいと思うときまでは」と言っています。例の「愛が目覚めたい時まで」です。ようするに永遠に共に居たい、と言っているのです。ここで花嫁の友、おとめたちは花嫁に対し「自分の愛する者に寄りかかって、 荒野から上って来るひとはだれでしょう」と問います。花嫁は「私はりんごの木の下で あなたの目をさまさせた。 そこはあなたの母があなたのために 産みの苦しみをした所。 そこはあなたを産んだ者が 産みの苦しみをした所」と言います。これは母の生みの苦しみを思い出させつつ、母の犠牲的愛について想像が及ぶようにさせています。ここでは、5節の前半とそのあとを歌う者をかえて解釈していますが、5節全体を花嫁の歌と解釈する可能性があります。5節の前半部分を良く見ると、「愛する者」という言葉は男性の愛人をさす「do:d」の単数形が使われていますから、歌っているのは女性です。そして第三者的言い方をしているので、花婿、花嫁の第三者である女性で「おとめたち」と推論できます。4節で「エルサレムの女」という言葉がでてきますがこれは「シュラムの女」とその友人と解釈できます。

雅歌を一通りみてみました。ここで一つテーマをもって雅歌をみてみたいと思います。それは雅歌に出てくる「愛」についてです。雅歌は愛を讃えた歌ですから短い文書ですが「愛」の言葉は多数登場致します。まず、新改訳聖書で「愛する者」「愛する方」と訳されている言葉です。34の節に登場します。花嫁が花婿をよぶ場合は「愛する方」、花婿が花嫁を愛する場合は「愛する者」と言う風に訳し分けられています。花嫁が「愛する方」の場合はヘブル語は「do:d」、ギリシャ語は「adelfi:dos」という語です。ヘブル語「do:d」はそもそもは叔父を表す語であり、愛する肉親の男性を示す言葉です。女性の愛人、即ち男性です。ギリシャ語「adelfi:dos」は男の兄弟、同胞、隣人であり、直接的には「愛する」という意味合いはありません。やはり男性をさして使う言葉です。これに対し、花婿が「愛する者」の場合は、ヘブル語は「raeya:」、ギリシャ語は「ple:sion」という言葉が使われています。ヘブル語「raeya:」は女性の仲間をさして使う言葉で男性の愛人、即ち女性です。ギリシャ語「ple:sion」も隣人という意味の中性名詞であり、愛人という意味合いはほとんどありません。従って、日本語で「愛する方」「愛する者」と訳されている言葉はそもそもは親戚や隣人をさして使う言葉が「愛人」という意味で使われるようになったもの、と理解できます。

次に「愛している」というように動詞として使われる場合を見てみます。7節しかありません。これはヘブル語が「愛する」の典型的言葉の「ahab」でありギリシャ語は「agapa:o」です。ヘブル語「ahab」は日本語で愛すると言う場合のすべてについて使われる言葉であり、ヘブル語では「愛する」全般に使われる言葉です。ギリシャ語の「agapa:o」はそもそもは神と人の愛の関係をさして使うギリシャ語で、本来は人間同士の「愛」について使われる言葉ではありません。新約聖書では拡大利用されています。人と人の愛の関係は神と人の愛の関係の反映である、という新約の考えが、拡大利用の背後にある考え方である、と言えます。雅歌の場合も同様に解釈できます。しかし注意すべき点は、花嫁が花婿を愛する場合についてのみこれらの語が使われています。そもそも、花婿が花嫁を「愛する」という動詞表現は雅歌にはでてきません。雅歌は花嫁が花婿を愛する、という愛の方向に主に関心を持っている、と言えるでしょう。これを比喩的解釈で解釈しますと、イスラエルの民が主なる神を愛する、という点、教会が主イエスを愛すると言う点、キリスト者が主を愛するという点に着目している、と言えるでしょう。「心を尽くして、精神を尽くして、主なる神を愛しなさい」の「愛する」です。日本語では「帰依する」という言葉が一番ふさわしいでしょう。これはそもそもは仏教用語です。単に、女性が恋い焦がれる男性に「愛する」として使う言葉ではありませんから、そのそも雅歌は単なる恋愛歌ではなく、イスラエルと主なる神の関係を示している文書なのだといえなくもありません。

もう一つ、「愛」と名詞で使用されている場合を見ます。2:5に「私は愛に病んでいるのです」という花嫁の言葉がありますが、この「愛」です。ヘブル語は「ahaba:」、ギリシャ語は「agape:」です。それぞれ、「ahab」「agapa:o」という動詞の名詞形です。意味は神と人の愛の関係を指すことばです。この使用が11節あります。「愛する」における「ahab」「agapa:o」と合わせると18節です。その他、花婿、花嫁の「愛」を名詞的に表現した部分や、美しい、と言う意味を日本語では「愛らしい」と「愛」を使った表現もありますが、この場合は、ヘブル語「ahab」ギリシャ語「agapa:o」の組み合わせではありません。全くの恋愛詩と思いきや、神と人の愛の関係を示す「ahab」「agapa:o」の組み合わせが隠されている、ということです。なかでも人が神に帰依する、という点です。例えば1:3は「あなたの香油のかおりはかぐわしく、 あなたの名はそそがれる香油のよう。 それで、おとめらはあなたを愛しています」と記されていますが、若干言葉を補って、「主よ、あなたの香油のかおりはかぐわしく、 あなたの名はそそがれる香油のよう。 それで、イスラエルの民はあなたを愛しています」という信仰告白になります。シェマーにおける「神を愛する」と同じです。「ahab」「agapa:o」の表現のところをこのようにイスラエルの民の主なる神へ帰依する心を現した歌として読みますと雅歌の他の側面が見えてきます。これが、雅歌が聖書の文書として選ばれ、過越し祭の直後に読まれる歌となるのです。そして、ユダヤ教、キリスト教において今でも比喩的解釈が生きている理由なのです。

最後に付言しておきたいことがあります。この雅歌が「諸書」に分類されている理由です。「諸書」にイスラエルの正統神学から見れば、外れている、とみなされるような文書が入っています。ヨブ記や知恵書がそうです。雅歌もお世辞にもイスラエル正統神学の流れにある、とは言えないものです。イスラエルの伝統的信仰は性に対しては極めて抑制的であり、雅歌のように男女の愛を開放的に語るようなものではありません。しかし、考えてみれば、神様が男女を御造りになったのですから、「性」を悪しきものにしているはずはありません。むしろ神秘的なものであり、全き安心、平和の中で行われるべきものが性的結合なのだということです。また、この雅歌ほど女性がおおっぴらに自分の願望、期待を語っている文書は聖書には他にありません。新約の時代に入ってからのキリスト教教会において女性が極めて大きな役割を果たしていたことが推測できますが、旧約の時代、イスラエル社会においては女性は神の前に出ることは赦されていませんでした。イスラエルの民の比喩として女性が主に申し上げているのですから驚きです。ラビ・アキバのエピソードや箴言の最後の「賢い妻」の箇所などみると、本当は旧約の時代にあっても女性の実質的社会的地位はかなりのものであったのかもしれません。それにしてもイスラエルの伝統からすれば、まともな信仰の書、とはみなされなこったこともよくわかります。旧約聖書はモーセ五書---歴史書---預言書、と続く、所謂正統神学の流れからずれた文書の中に、人生の真実、そして「神の愛」の広がり、と深さをみることが出来る、ことを注意しておきたいと思います。祈ります。

（ご在天の主なる神様、本日は雅歌を学びました。男女の愛の描写の裏に、主なる神とイスラエルの民の愛の関係があることを知りました。私たち新しきイスラエル即ち教会と主イエスの関係を暗示していると解釈することもできます。しかし、私たちは、直截に雅歌の言葉を受け取りつつ、男女の愛、性的関係に秘められた神の摂理を見ることもできます。すべてを包む神の愛を感謝致します。主イエスのみ名により祈ります。アーメン）